

ちいさな、あの家

二十年前

おねえちゃんが、ブランコのように揺れていた。

ずるい、と思った。よれよれのパジャマを着たおねえちゃんは、揺れて遊ぶ年齢には見えなかった。

このおねえちゃんは知っている。大人たちがいつも噂にするくせに、誰も近寄ろうとしない「あの家」に住んでいるおねえちゃんだ。

神社には、いつもカブトムシを取りに来ていた。松の根本をじっくり探せば、ときどきカブトムシやコクワガタが見つかる。今日は、おねえちゃんがみつかった。

おねえちゃんは松の枝にぶら下がって揺れていた。すごいのは、手を使っていないことだ。あごにロープをかけて、それだけで身体を支えていた。

ぴんぴんに張ったロープが、おねえちゃんが揺れるたびに、ぎちっ、ぎちっと言音をたてる。もっと大きく振れば楽しいのに、と思ったけれど、おねえちゃんは自分で動こうとはせず、風にまかせて揺れていた。

おねえちゃんがすごい技を見せた。ロープをねじって、くるくると回りだす。サーカスで似たような芸を見たことがあった。髪の毛の束で、身体を吊って回るやつだ。おねえちゃんは首で自分を吊って回っている。拍手しようと思ったけれど、風に吹かれているだけのようにも見えたので、やつぱりやめた。

ぴちゃり、と何かが顔についた。雨が降ってきたのかと思って空を見上げたけれど、松の梢からは初夏の青空がのぞいている。

手の甲でぬぐうと、黄土色の汚れがついていた。鼻を近づけると、うんこの匂いがしたので、慌てて松の皮に手をこすりつけた。

どこから降ってきたのかは、すぐにわかった。お姉ちゃんのおしりが茶色くなっていて、そこらばたばたとしずくが落ちているのだ。風が吹いたと

きにしずくが飛んで、顔についたに違いない。

腹が立った。うんこをもらすなんて、小学生になってからは一度もないのに、中学生ぐらいのおねえちゃんが平気でやっているのだ。

「降りてよ。うんこ顔についたよ」

謝ってほしくて、抗議した。もちろん、うんこが飛んでこない位置から。

おねえちゃんは答えもせず、ロープをきしませながらゆっくりと回っていた。

無視されたことに苛立ちが募り、強く言おうと近づいたときだった。

ばつん、という音とともに、おねえちゃんの顔が迫ってきた。すごい勢いでおねえちゃんに押し倒され、組伏せられてしまった。

目の前に、おねえちゃんの顔があつた。顔色は灰のようで、白眼を剥き出しにして、口からは大きなヒルみたいな舌がだらしなく垂れていた。

「重いよ！ どいてよ！」

おねえちゃんはぴくりとも動かなかった。息もしていなかった。

途端に、取り返しのつかないものを押しつけられた恐ろしさで、全身に鳥肌が立った。

僕は女の子のように悲鳴をあげた。おねえちゃんの耳元なのに、まるで気にしていないようだった。叫びながら、力の限り体をくねらせると、おねえちゃんの下からなんとか出ることができた。

おねえちゃんは、茶色の尻を上に向けて、枯れた松葉のじゅうたんに横たわっていた。

僕はここから逃げることにしか頭になく、わめきながら神社の外へと走る。

運がいいことに、ちょうど自転車に乗ったおまわりさんがいた。今年の春から駐在所に来た杉浦さん<sup>すぎうら</sup>だった。

「キミは確か、春田さん<sup>はるた</sup>とこの信明君<sup>のぶあき</sup>だろう？ いったいどうしたんだ」

「おねえちゃんが、うんこもらしてて、動かないんだ！ ゆらゆら揺れてて、落ちてきたんだ！」

喋っているうちに涙が出てきた。おまわりさんは真剣な顔になり、素早く自転車を降りた。

「案内してくれるかな」

首を振った。もうおねえちゃんには近寄りたくなかった。

「早く見つければ助かるかも知れないんだ。勇気を出してくれないか」

おねえちゃんは手遅れになっていると、ほとんど確信していた。けれどもおまわりさんに、いくじなしと思われるのは嫌だった。

「……こっち」

神社を囲む松林の中を指さし、さっき逃げ出した場所へと歩いていった。

おまわりさんは注意深く周りを見回しながら後をついてくる。怖くて、心臓がおかしなリズムで打っていた。

あの場所に戻ってきた。松の枝から切れたロープがふらふらと揺れている。その下には、うつぶせになったおねえちゃんと、もうひとり、いた。

灰色のスウェットに雪駄をはいた四十歳ぐらいのおじさんが、おねえちゃんを見下ろしていた。薄くなった髪はふけがからみついていて、無精ひげもぼうぼうに生えていた。みすばらしい姿なのに、眼だけはおかしなほど強く光っていた。

「虎造……さん、何を？」

おまわりさんは、困ったような声を出した。このおじさんも知っている。

「あの家」に住んでいるからだ。お父さんから近づくと言われていたけれど、理由はわからなかった。

「娘だ」

虎造おじさんは、ぼそりと言った。

「だったら早く、助けないと……」

「もう死んでいる」

何の感情もこもっていない声が、齒の欠けた口からこぼれた。おまわりさんが慌てておねえちゃんに駆け寄る。手袋をはめ、呼びかけて体をゆすったり、首筋に手をあてたり、眼を指で開いたりしているのを、黙って見ているしかなかった。

ふと虎造おじさんの方を見ると、スウェットのズボンがおかしな形になっ

ていた。ちんちんのあるところが、テントを張ったようになっていたのだ。おしっこが出そうなときに、ちんちんがときときに尖ることはよくあった。けれども、大人がそうになっているのを見るのは初めてだった。

やがておまわりさんは立ち上がり、悲しい顔で虎造おじさんに向き直った。

「残念です、娘さんはもう……」

わかっている、と言いたげに虎造おじさんは黙っていた。娘の死体を眼前にしても、なんとも思っていないようだった。

「駐在所に戻って、鑑識に来るよう連絡してきます。お手数ですが、救急車を呼んでもらえますか。ひとりしかいないものですから」

虎造おじさんは、黙って頷いた。おまわりさんは制帽のつばに手をあてて少し頭を下げると、駆け足で神社の外に出ていった。

風が吹き、洗っていない犬の臭いが漂ってくる。虎造おじさんからだった。お父さんに言われなくても、この人のそばにはいたくなかった。まして、地面にはおねえちゃんが怖い顔で倒れているのだ。

帰る、と言おうとしたとき、虎造おじさんが動いた。いきなり裸足になり、スウェットのズボンを脱いでしまった。毛がもじやもじやに生えた太ももの間に、赤黒いものが反り返っていた。最初、それがちんちんだとは判らなかった。

虎造おじさんは上にはスウェットを着て、下には何もはいていなかった。教室でやったらみんなを笑わせることができると思ったけれど、今ここでそんな姿を見せられても、戸惑うばかりだった。

虎造おじさんはおねえちゃんに近づくと、うつぶせになった腹の下に足を入れ、布団のようにひっくり返した。おねえちゃんがどさりと音をたて、枯れた松葉が飛び散る。娘にそんな扱いをするのも驚いたし、そもそも何をしたいのか全然わからなかった。

おまわりさんに頼まれたことがあるはずなのに、虎造おじさんはそんなことも忘れてしまったようだった。だからといって大人に、しかも虎造おじさんに文句を言えるほどの勇氣はなかった。

いきなり、虎造おじさんはおねえちゃんのパジャマのズボンを引き下ろした。パンツも一緒に下ろしてしまっただけで、コンクリートのような色の太ももが現われた。お母さん以外に、女のひとのお股を見たことはなかった。おねえちゃんのお股は、お母さんより毛が少なくて細かったけれど、下痢みたいなうんこがべったりと、ももの内側についていた。

おねえちゃんと虎造おじさんは、ふたりとも下半身丸出しになってしまった。どうしようもなく不安なのに、虎造おじさんが何をしようとしているのか、最後まで確かめたいという気持ちが抑えられなかった。

虎造おじさんはおねえちゃんの股をひらき、その間に身体を入れた。手に下痢うんこがついたけれど、全然気にしていないようだった。

あたりまえだけれど、おねえちゃんは人形のように動かなかった。おじさんは手に唾を吐き、そり返ったちんちんに塗りつけた。あの手では絶対に触られたくなかった。そしてちんちんを、狙いを定めるようにおねえちゃんのお股に押し当てた。

信じられないことが起こった。虎造おじさんのちんちんが消えたのだ。おじさんとおねえちゃんのお股がぴたりとくっついている。と思ったら、おじさんが腰を引くとまたちんちんが現われた。いったいどうなっているのかさっぱりわからなかった。

おじさんの腰と、おねえちゃんのお股がぶつかって、手を打つような音をたてた。一緒にうんこも飛び散った。おじさんの顔にしぶきが飛んだけれど、やっぱりにしてはいないようだった。

おじさんがぶつかるたび、おねえちゃんはがくがくと揺れていた。頭がぐらぐらんと上を向いたり下を向いたりして、ひどく怖かった。

動きが、だんだん速く、大きく、強くなっていった。それは道路工事の機械のような乱暴な動きで、とてつもなく忌まわしいものを見せつけられているような気がして、一歩下がってしまった。

「うーっ！」

犬のような雄叫びをあげて、おじさんの動きがぴたりと止まった。おねえ

ちゃんのお股に、押しつけるように腰をくっつけていた。ずいぶん身体に力が入っているのか、尻の筋肉がこわばり、眉間にしわを寄せていた。

僕は凍りついたように動けなかった。お父さんが近づくと言っていたわけが心の底からわかり、一瞬でも好奇心を持ってしまったことを後悔したけれど、足が震えて逃げ出すこともできなかった。

おじさんはふうっと息をつくとおねえちゃんからゆっくりと離れた。反ったままのちんちんが、あんかけのように濡れていた。

おねえちゃんを見て、おじさんのちんちんが消えた秘密がわかった。お股の真ん中にぽっかりと穴があいて、甘酒みたいなものが垂れていた。この穴にちんちんを入れていたから、消えたように見えたのだ。

どうしてそんなことをするのかは、まるでわからなかったけれど。

おじさんがぬるりと立ち上がり、こちらを見た。スウェットや顔には黄土色の点々が散らばり、ちんちんのまわりはおねえちゃんのうんこにまみれていた。

ぱかっと口があいた。笑っているのだと気づくのに、だいぶ時間がかかった。

「お前もやるか？」

唇の間で、粘ついた糸が上下した。

今、虎造おじさんがしたことを、僕がやるというのか。

突然吐き気が喉を登ってきて、口を押さえながら激しく首を振った。

後ずさりをする。足がついてこなくて、どすんと尻もちをついた。気持ちばかりが焦り、虫のように地面に尻をこすりながら下がる。やっと足の裏が土を噛むと、立ち上がってわき目もふらず逃げ出した。

松の森を駆け抜けて道路に飛び出したとき、おまわりさんとぶつかりそうになった。

「あっ、キミ……」

呼びかける声を見捨て、田んぼ道を全力で走った。

ヒトの形をした、ヒトとは違うモノを見てしまった。

誰かに話す気にもならなかった。話せばおねえちゃんの真っ黒な舌や、虎造おじさんの反り返ったちんちんや、ふたりでしていた怖いことを思い出し  
てしまうだろう。

もう二度と、「あの家」には関わりたくなかった。